

ハンブルク・バレエ団 2023年日本公演
ジョン・ノイマイヤーの世界 Edition 2023

—第1部—

ジョン・ノイマイヤーの世界

私の世界はダンス...

Dance DANCE dance Dance DANCE...

私の世界はダンス！

『キャンディード序曲』

思い返せば私は、いつも踊りたがっていた — ダンスが何であるかを知る前から。子供のころ、レコードをかけレナード・バーンスタインの『キャンディード序曲』を聴けばたちまち、リビング・ルームは広いステージに変身した — ひたすら踊った。

アメリカ中西部のウィスコンシン州ミルウォーキーで生まれた私が初めてダンスに触れたのは、母が連れて行ってくれたテクニカラーのミュージカル映画だった。

『アイ・ガット・リズム』

この曲を聴いたときの無垢の喜び、ジーン・ケリーの爽快でエネルギーな踊りは、今も私の中にある。

長いこと、ひそかにダンスを習いたいと思っていた — やがて両親は、タップ・ダンスの教室に連れていってくれた一次にアクロバットに — そして — ついに、バレエ・クラスのバーに立つ日が来た。

『くるみ割り人形』

基本のポジションとエクササイズに挑み — 初めてバレエのステップを踏むと — 笑みがこぼれた — まるで、ふるさと帰ったような心地がした。

私が『くるみ割り人形』で再現しようとしたのは、まさにあの時の気持ちだ — マリーは12歳の誕生日にトウシューズをプレゼントされる。履いた瞬間、マリーは夢見る — 私が夢見たように — クラシック・バレエの世界、その魔法の世界の一部になることを。

以来、私はクラシック・バレエの言語に魅了されて多くのバレエを創ってきたが、『くるみ割り人形』は、バレエという偉大な伝統に対する私のオマージュであり続けている。

『くるみ割り人形』のパ・ド・ドゥは、名高きバレリーナ、アンナ・パヴロワとその師、エンリコ・チェケッティの写真に触発されて創った。私自身を芸術家として導き育てくれた恩師たちに、感謝と敬愛を込めて。

『ヴェニスに死す』

創作は、ダンスの側面でもっとも楽しいものだ。

習い始めの頃から、踊るだけでなく、ダンスを創りたいと思ってきた — 言葉のない、素晴らしい世界を、動きで表現したかった。ときに創作の行為そのものが、作品のテーマになった。

私の『ヴェニスに死す』では、トマス・マン原作とは異なり、主人公アッセンバッハは振付家となり、ダンサーたちを通して、アッセンバッハ自身の感情を形にしてゆく — 自らの創作のなかで、インスピレーションを探し求める。

『シルヴィア』

ダンスは、神話に生命を吹き込むための、最適な手段でもある。私は、ギリシャ神話の登場人物に着想を得た作品も創ってきた — 音楽家オルフェウス、放浪者オデュッセウス、そして女神ディアナとそのお気に入りのニンフ、シルヴィアは、私の作品『シルヴィア』を“踊っている”。

…しかし神話それぞれの中に、何かしらの私の要素、私の世界に通じる率直な意義を見出すことが必要だ。それにより、神話のヒーロー、ヒロインたちに、人間的な振付の形を与えていくことができる。バレエでは、神話の人物たちは、ときに斬新で、驚くほど現代的な姿をとることもある。

パリ・オペラ座バレエ団のために振付けたドリープ作曲のバレエ『シルヴィア』では、人間関係の永遠の真理を浮き彫りにしたいと思った。ディアナのお気に入りのニンフ、シルヴィアは、強く野心的で解放的な女性だったが — 羊飼いアミンタの、謙虚で誠実な愛を受け入れるにはまだ無防備だった。